

機関番号：22401
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20592671
 研究課題名(和文) 若年層の統合失調症患者の親にとっての精神障害者家族会の意味に関する研究
 研究課題名(英文) Significance of Support Groups for Families of Young Schizophrenic Patients
 研究代表者
 横山恵子(YOKOYAMA KEIKO)
 埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授
 研究者番号：80320670

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、精神障害者家族会に参加する若年層の統合失調症患者の親にとっての家族会の意味を明らかにするとともに、日本の家族会の将来のあり方を検討することである。研究方法はエスノグラフィーであり、一つの地域家族会で参加観察を行い、17名の家族会員へのインタビュー記録、家族会資料をデータとした。分析の結果、『時代を読み世代交代しながら変化する家族会』、『家族自身の社会資源としての家族会』、『精神障害者家族としての人生に意味を見いだす場としての家族会』という3つの文化的テーマが抽出された。家族会は地域の有効な資源である。家族会が家族自身のセルフヘルプグループとして活動できるよう、保健医療福祉の専門家が家族会とパートナーシップで支援していくことが必要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to clarify the significance of support groups for the parents of young schizophrenic patients and to discuss the future of such groups in Japan.

The research method was Ethnography and participant observation, where 17 members' interview records and support group information were collected.

Three cultural aspects of support groups were identified: (1) transformational, in which generational changes reflect the times, (2) functional, as a social resource for group members, and (3) goal oriented, as family members of schizophrenic children find a new purpose in their own lives.

Support groups that act as a self-help group for families can be a force that promotes mental health. It is important that healthcare professionals, partnering with support groups, provide support to these groups.

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|------|-----------|---------|-----------|
| 20年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 21年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 22年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,800,000 | 540,000 | 2,340,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：精神障害者、家族支援、家族会、セルフヘルプグループ

1. 研究開始当初の背景

精神保健福祉制度の改正や入院期間の短縮を図る診療報酬の改定、さらに非定型抗精神病薬の導入など、統合失調症患者を取りまく環境は大きく変化してきた。その結果、家族と離れて長期入院を余儀なくされてきた精神障害者は、地域で治療を受けながら生活することができるようになってきた。家族は地域で暮らす精神障害者を支える役割を担っており、またこれらの家族を組織として支えているのは精神障害者家族会である。しかし、精神障害者家族会の多くは会員の高齢化と、新たな入会者の減少にともなって、その活動は低迷しているのが現状である。

入院医療中心の施策の中で社会的活動を担ってきた旧来の家族と、地域生活中心の施策の中で患者を抱えている新しい家族は、異なる経験によって、家族会活動への期待に乖離が生じていると考えられる。比較的短期間の入院であったり、あるいは入院経験がない若年層の患者の親は、家族会に何を求めて入会し、入会によってどのような経験をし、家族会にどのような意味を見出しているのだろうか。本研究では、精神保健福祉の変遷によって2極化している家族会員の中で、現在の家族会活動を担う新しい世代の会員の経験を知ること、これからの精神障害者の親にとっての家族会の意味を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、精神障害者家族会に参加する若年層の統合失調症患者の親にとっての家族会の意味を明らかにするとともに、日本の家族会の将来のあり方への示唆を得ることである。

3. 研究の方法

本研究は質的帰納的研究であり、方法論として、エスノグラフィーを用いた。首都圏近郊に位置するA家族会を対象とした。データ収集は参加観察法とインタビューにより行った。参加観察法では、A家族会での家族会活動全般に参加し、フィールドノートを作成した。インタビューではA家族会に入会している統合失調症の患者の親を対象とした。当事者である子ども年齢は、調査時点で18～29歳までとしたが、この条件に合致した家族は13名であり、補足的に、家族会活動の中心的メンバー4名

にもインタビューを実施した。最終的にインタビューの対象となった家族は17家族17名であった。また、家族会の通信など過去の家族会資料等を参考にした。本研究は、東京女子医科大学倫理委員会の審査を受けて行った。家族会の代表者及び研究協力者に研究内容を口頭と文書で説明し、同意書への署名をもって同意を得た。

4. 研究成果

分析の結果、『時代を読み世代交代しながら変化する家族会』、『家族自身の社会資源としての家族会』、『精神障害者家族としての人生に意味を見いだす場としての家族会』という3つのテーマが抽出された。

第1のテーマは『時代を読み世代交代しながら変化する家族会』であり、このテーマには、【A家族会の歴史的変遷】、【その時代に中心的に活動した人々】、【A家族会の活動】、【A家族会の特徴】の4つのドメインが含まれていた。【A家族会の歴史的変遷】は、「行政に働きかける運動体」としての時代、「地域資源の創出」の時代、「主体的な家族支援」の時代に区分され、それぞれの時代の中心的家族を、「旧世代」、「移行世代」、「新世代」と命名した。若年層の統合失調症患者の親は、「新世代」に該当した。【A家族会の活動】では、「体験の分かち合い・親睦」、「学習・情報提供」、「広報・啓発活動」、「行政への政策提言・連携」、「ネットワーク活動」、「主体的支援活動」の6つの活動に構成されていた。【A家族会の特徴】では、「家族会内での世代交代の葛藤」、「母親の感覚を大切にされた家族会」、「一部の家族が担う家族会活動」、「対等性、開放性、自立性を持つ家族会」の4つの特徴がみられた。この〈対等性〉は新世代の特徴でもあった。

第2のテーマは『家族自身の社会資源としての家族会』であり、このテーマには、【家族会入会に至るまでの家族の心理的变化と覚悟】、【家族が家族会で得たもの】、【困難を抱えながらも介護する家族】の3つのドメインが含まれていた。【家族会入会までの家族の心理的变化と覚悟】には、「混乱」から始まり、「発病や再発への後悔／自責感」、「孤立感」、「元に戻る／期待」、「元には戻らない／覚悟」を経て、「家族会への入会」に至るという6段階が見出された。家族会に入会するためには、病気に対する「覚悟」が

必要で、家族会入会への敷居は非常に高かった。【家族が家族会で得たもの】には、《情報》、《未来への希望》、《安全基地としての居場所》、《信頼できる仲間》、《家族の体験的知恵》、《自分への自信（エンパワメント）》の6つが含まれていた。また、【困難を抱えながらも介護する家族】には、《ひきこもって孤立》、《家が病院》、《工夫を重ね続ける家族》の3つの特徴が見いだされ、地域ケアが乏しい中で、旧来の家族と同様に、新世代の家族も退院後のケアやリハビリテーションを委ねられ、困難な状況が継続している現状が明らかになった。

第3のテーマは『精神障害者家族としての人生に意味を見いだす場としての家族会』であり、このテーマには、【家族会への参加を通して変化する親子関係】、【家族会への参加を通して広がる家族会の目的】の2つのドメインが含まれていた。【家族会への参加を通して変化する親子関係】では、《心的外傷体験》から始まり、《子どもと一体化》、《比較による一喜一憂》、《比較とは異なる新たな価値の発見》を経て、《親子の分離》に至るという5段階が見出された。急性期の子どもの状況は家族にとって心的外傷となって、子どもと家族が次の段階に進むのを阻害していた。【家族会への参加を通して広がる家族会の目的】には、《子どものための家族会》から始まり、《家族自身のための家族会》、《社会のための家族会》を経て、《精神障害者家族としての実存的意味を見いだす》に至るという4段階が見出された。家族会入会当初は、子どもの回復のためであった家族会が、自分にとって必要なものだという認識に変化し、さらに、精神障害にとらわれず、誰もが住みやすい社会を作りたいと考えてようになっていた。さらに、精神障害者の子どもを持った家族としての自分の使命を見いだしていた。

以上のことから、若年層の統合失調症者の親は、家族会を家族自身のためのセルフヘルプグループとして、積極的な家族支援活動を展開することで、隠さない生き方や家族自身のリカバリーを目指していた。精神障害者家族会は、家族にとっての重要な社会資源であった。

精神障害者の置かれている状況は変化し、若年層の統合失調症患者においては、短期の入院、あるいは入院することなく外来で治療ができるようになった。しかし、まだまだ社会資源の乏しい状況の中では、これまでと同様に、〈退院後のアフターケアは全て家族が担い〉、家の中に《ひきこもって孤立》している状況が見られた。本研究の結果、患者にとっては、長期入院を余儀なくされていた時代よりも、さらに限られた人間関係の中で孤立している現状がある。家族にとっても、急

性期の症状の激しさ、病識の乏しいわが子を診療に導くことや内服を継続させることの困難さは継続し、急性期の症状を抱えたまま早期に退院し、自宅で介護する状況を新世代家族は、《家が病院》の状況だと語り、介護者である親の負担はこれまで以上に大きい現状であることがわかった。これらから、旧来よりも一層、家族への支援が急務であると言える。

そのような中で、精神障害者家族会は家族を支援する重要な社会資源であるが、家族会入会には、家族が子どもの精神障害を受容することが必要であり、その敷居は非常に高い。これが、家族会への入会者を乏しくさせている理由の一つであり、新しい家族からの入会を待たずだけでなく、家族会の方から手を差し伸べる重要性が示された。

A家族会の場合、《母親の感覚を大切にした家族会》として、女性のもつ包含や受容、会員の明るさで、若年層の患者の親を招くことができていた。新世代は、これまでのA家族会の特徴である〈開放性〉、〈自立性〉に、さらに、互いの〈対等性〉を重視することで、家族自身のセルフヘルプグループとしての基盤を作った。その結果、若年層の患者の親は、家族会に子どもの介護に役立つ《情報》や《未来への希望》を求めて入会し、家族会活動を通して、《家族のための家族会》、《社会にとっての家族会》へと目的を次第に変化させ、家族の《体験的知恵》を生かした家族支援活動や、誰もが住みよい社会を目指すようになった。さらに《精神障害者家族としての実存的意味》を見だし、自分の人生に意味を見いだして、子どもとともに親自身も「リカバリー」を目指していた。新世代の家族会活動の目標は、親自身の自立でもあった。

精神障害者家族会がセルフヘルプグループとして活動していくことこそが、家族にとっての有効な地域資源となり、精神保健福祉を推進する大きな力になるだろう。今後は、看護者などの保健医療福祉の専門職は家族会とパートナーシップをとりながら支援していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)
横山恵子, 精神障害者家族会の現状と今後の課題—ある地域家族会の歴史的変遷を通して—, 東京女子医大看護学会誌, 査読有, 4(1), 1-6, 2009

〔学会発表〕(計 1件)
横山恵子, 若年層の精神障害者家族にとって

の家族会—家族会入会までの家族の心理的
変化と家族会で得たもの—, 第 30 回日本看
護科学学会学術集会, 札幌, 第 30 回日本看
護科学学会学術集会講演集 ; 413

〔図書〕(計 1 件)

田中美恵子、麻原きよみ監訳, 掛本知里, 大
森純子, 田中美延里, 金谷光子, 妹尾弘子,
下川清美, 横山恵子, 畠山卓也, 志賀加奈子,
田中美恵子, 参加観察法入門, 医学書院, 2010

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山恵子 (yokoyama keiko)

埼玉県立大学・保険医療福祉学部・准教授
研究者番号 : 80320670

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

